



# 双塔

カトリック新潟教会

2016年11月

No. 342

## 永遠の安息（死者の日）

新潟教会協力司祭 鎌田耕一郎

「死の顔」この劇は、ほかの場面はことごとく美しいものであろうとも、最後の場面は陰惨である。ついに土が頭の上に向けられる、これで永遠におしまい（パスカル・パンセ210）といわれるように、死の顔は冷酷で陰惨である。

死は例外なしに、すべての人に訪れるという普遍性において確実であり、しかし、誰もその訪れの時を知り得ないという点において不確実である。無数の人びとが生まれ、死んだという事実はきわめて日常的なことでありながら、個々の死は「閃きわたる稲妻」（マタイ24・27）「夜の盗人」（同24・43）のように突如として人を襲うのである。「人は一人で死んでゆく」（パンセ211）といわれるように、死は本質的に孤独なものである。死の床の傍らに愛する人々が見守るだろう。けれども彼等は傍観者にすぎない。死は全く個別的に各人を訪れるのである。

バッハは死の前に「甘き死よ来たれ」という有名なカンタータを作曲した。しかし、自然的に見た死は決して甘いものではない。死が罪の結果であるとすれば、それが人間にとってにがいものであるのは当然であろう。

「イエスと死」 公生活の中で、イエスはしばしば死と対決される。死とつらなる病人の治癒はもとより、三つのよみがえりの奇跡——ナイムのやもめの息子（ルカ7・11以下）、会堂司ヤイロの娘（マルコ5・25以下）、ベタニアのラザロ（ヨハネ11・1以下）——がある。しかし、イエスが死を克服するために選んだ決定的態度は、奇跡を行なうことではなく、自ら死を味わうことであった。

イエスは、次第に姿を明らかにしながら近づいてくる死を意識し、見つめておられたと思われる。しかし、イエスは死すらもその使命を妨げ得ないこと（ルカ12・33）、ご自分の死の救済的意味について（マルコ10・45）、御父の定めであること（ヨハネ10・17）、その死は生命へとつらなり（ルカ9・24）、そして復活と昇天の栄光と終わりの日の再臨によって、全うされることを告げるのである（マタイ26・64）。

イエスは、僧 快川のように、「心頭滅却すれば・・・」とはいわれなかった。ゲッセマニの夜の苦悶の中で「出来ればこの杯がわたしの前を通り過ぎるようにしてください」（マタイ26・30）と祈られたのである。イエスはその生涯の終わりに、人間の本性がさらされる最大の苦しみを体験することによって、救いをもたらすべき人間との連帯性を極限まで示されたのである。それ故に、イエスの死は父なる神に対して、また友なる人間に対する愛の最高のしるしになるのである。

この重いテーマの終わりは、フランシス・ジャムの詩の1節で結びたい。

「神さま、私の死ぬ日が美しく清らかであるようにしてください、・・・そして私が心の大きな平安の中で死んでゆけるようにしてください」。

## そよかぜ便り

### ■「秋の信徒大会 ー各教会を巡礼ー ----- 10月10日（日）-----

『いつくしみの特別聖年』の今年、秋の信徒大会は新潟地区内の教会巡礼を行った。9時に新潟教会に集合した約50名は、チャーターしたバスで出発。車中は終始、和気藹々とした雰囲気であった。花園→鳥屋野→亀田→白根→寺尾→青山教会の順に巡礼。亀田教会では美味しいお弁当が用意され、楽しいランチタイム♪  
白根教会では小さな聖堂に60名弱が全員収まった！夕方に新潟教会に戻り、菊地司教様、大瀧神父様、ラウール神父様の共同司式でミサが捧げられ、ミサ後はゆるしの秘跡が行われた。

